研究紀要 22

かながわの考古学

2017.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

目　次

神奈川県伊勢原・秦野地域の関東ロームの層序について
旧石器時代研究プロジェクトチーム …… 1

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ
－後期前葉期　堀之内式土器文化期の様相　その8－
縄文時代研究プロジェクトチーム …… 13

弥生時代後期竪穴住居の研究（1）
弥生時代研究プロジェクトチーム …… 19

考古学の先駆者　赤星直忠博士の軌跡（14）　－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－
古墳時代研究プロジェクトチーム …… 29

神奈川県における古代の鉄（7）　－生産関連遺構・遺物の集成－
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム …… 39

神奈川県の県央地域の中世遺跡（2）
中世研究プロジェクトチーム …… 55

近世道状遺構の集成（2）
近世研究プロジェクトチーム …… 67

考古学の先駆者　赤星直忠博士の軌跡（14）

—通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介—

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　言

・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関係する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。

・研究紀要 22 号には相模原市域の 10013 番、横須賀市域の 03141・03168 番を掲載している。

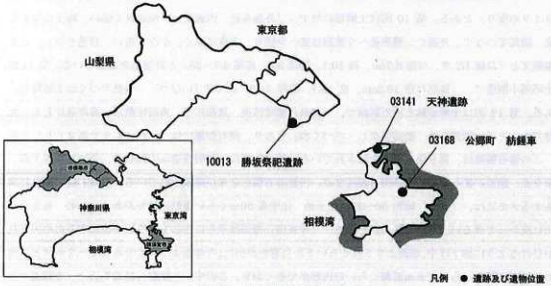
・番号は埋蔵文化財センター年報 14～19 に掲載されている番号に対応している。

・執筆分担は相模原市 10013 番：新山保和、横須賀市 03141 番：吉澤健、03168 番：長澤保崇が行った。

・各記述は「1．赤星ノートの内容」「2．記載資料の整理」の２つに大きく分け、1．の細目は［調査（踏査）年月］［資料保管場所］［記載内容概略］とし、2．は［(遺跡及び）遺物（遺構）概要］［掲載図書］［掲載図書概略］［小結］などとし、資料に応じ該当部分を記載した。

・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。

・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれらから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第１図　対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 相模原市 10013　勝坂祭祀遺跡（４）　相模原市磯部字勝坂 1904

１．赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月日]

昭和 52 年７月 31 日

[資料保管場所]

個人蔵

[記載内容概略]

前号でも、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介したが、本号も引き続き本封筒に入っていた資料について紹介する。

今回詳細する資料は、地形図５枚と図面７枚、メモ３枚、写真４枚である。

地図は、４枚が縮尺 1/3,000 で、１枚が「原町田」の 1/25,000 である。縮尺が同じ４枚の地図のうち１枚は「新磯」の原図であるが、他の３枚は部分的なコピーである。勝坂遺跡試掘調査概要図（第２図）には、凡例として、試掘溝４２本、住居跡３１基、配石遺構１４基とあり、その下方に祭祀遺跡の位置と見られる「×」が記載されている。勝坂遺跡付近図（第３図）には、凡例として、開発区域と勝坂遺跡（A・B・C）とあり、開発区域として囲まれた中には「D」と記載されている。勝坂遺跡（国指定史跡予定範囲）とある地図（第４図）には史跡範囲が線で囲まれており、「新磯」とある地図（第５図）には試掘地域と A～C の範囲が線で囲まれている。1/25,000 の地図（第６図）には「県史遺跡記入原稿図」と書かれており、祭祀遺跡の住所などが記載されている。なお、第５・６図に関しては、範囲が広いため一部のみ掲載している。

実測図は、鏡４面の拓本（第７図）、拓本をとった鏡のうち３点の断面図（第８図）、その鏡３点と石製模造品６点（第９図）の図版が作成されている。第８図の鏡の断面図には、「1/2 欠　鍋多き白緑色　復原径 7.2cm、１ミリの反あり　鋸歯　長楕円　珠文鏡　文様極めてうすく不明瞭　縁は低いなまこ形」と「径 6.8　有文（鋸歯放射線珠文鏡）に珠　縁は低いなまこ形」と「鈌鏡　やや楕円形　鋸歯珠文鏡　4.5cm　2.5～３ミリの反り」とある。第 10 図は土師器の坩で、「外面茶色、内面茶色、焼成良く堅い、胎土は細かく良質　頸部でつなぐ、外面クシ整形後ヘラ整形底部ヘラ切り、全体に厚く、かなり重い、丹塗りなし」とする観察文と「口縁 1/2 欠、口径 8.7cm、高 10.1、胴径 9.6、底径 3.7～38」と計測値を載せている。第 11 図は土師器小型壺で、「復原口径 10.2cm、高 18.7、胴径 14.3、底 6.7（いびつ）　丹塗手づくね土師器壺」とある。第 12 図は土師器鉢と滑石製鏡で、「和泉丹塗坩破損　鬼高坏で　鬼高坏歪点　高坏破片もあったが捨てた」と「土師鬼高鉢　断面図なし　手づくね」とあり、滑石製鏡には「鈕長 13 ミリ高２ミリ」とある。この滑石製鏡は、第９図－４に掲載されている。第 13 図は、石製模造品の図版で、子持ち勾玉１点、勾玉２点、剣形石製品６点、刀子形石製品２点、円盤形石製品２点が掲載されている。第 14 図の採集経過に関するメモには、「出土　昭和 36～37　出土地　住宅裏 50mくらい東側に竹やぶある少し北　もと西方の川に向かってゆるい傾斜の西向の畑だった、（今東側丘裾畑は平らにされている）水田にするため川より水がひけるように掘下げ中、畑面より３尺くらい下から遺物が出た、今畑面より川より水まで－２mほど　頭大の河原石多数をならべて５m直線くらいの円形ができており、この中から散在的に遺物出土、土師編や土師の破れたものはすべて（採集保管のものは今存）一部に火をたいたあともあって銅製の↑の如き三本足のもの２個出たがすてた」とある。第 15 図と第 16 図のメモ書きには「滑石製　小臼玉 56　鏡 68　多く粗製

剣59　多く粗製　曲玉6＜1　丸味有　5扁平　石質　滑石　片岩　蝋石」とある。「白玉1＋55 56　曲玉6　鏡27＋37＋4　68　剣28＋23＋8　59」「銅鏡有文1　有文半欠1）②　鉄鏡　有文1　①」で「暗緑色細粒凝灰岩管玉（大・両端より穿孔）1　滑石模造品　鏡68　曲玉6　剣・刀子」59　丸玉・白玉」56　子持曲玉1　土師　壷　丹塗　厚手　坩」とある。

昭和52年7月31日に現地調査した時に撮影した土器（第17図）や石製模造品（集合写真及び個別写真）（第18図）、資料採集地点の様子（第19・20図）が写されている。台紙に1～2枚写真を貼り、一部の写真にコメントが記載されている。第19図の写真には、「相模原市勝坂　有鹿社内の地蔵水池」とある。第20図の写真には、「相模原市勝坂　石製模造品出土地遠景」とある。

2．記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

地図に関しては、神奈川県相模原市南区に所在する勝坂祭祀遺跡の範囲を示した地図である。同一縮尺の地形図は、若干範囲が異なるものの、同一内容を記載したものである。アルファベットのA～Cが何を意味するかは不明であるが、第2図を見る限り、試掘結果を受けて勝坂遺跡の範囲を確定させていったものと見られる。

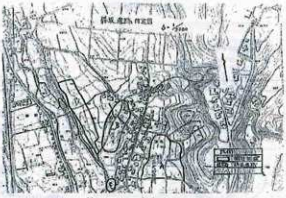
土器の実測図は、土師器の坩と小型壷、鉢である。坩と小型壷（第10・11図）には丹塗りの表現があるが、2点とも現存しないので詳細は不明である。鉢（第12図）のみ現存しており、粗製の手づくね土器である。鏡の拓本は4点であるが、断面は3点のみであり、1点は拓本のみで断面実測がされた痕跡は認められなかった。石製模造品は、滑石製鏡や剣形石製品、子持勾玉など、出土した種別すべてが実測されている。

写真は、現地調査した時に撮影した遺物及び採集地点の様子である。集合写真には、県史に掲載されていないものや現存しない遺物（第17図）もあり、大変貴重な資料と言える。また、35ミリの白黒写真のネガも1枚あり、台紙に貼られた写真のネガである。　（新山）

引用・参考文献

大場磐雄 1972『神道考古学講座　原始神道期一』第2巻　雄山閣出版
神奈川県県民部県史編纂室 1979『神奈川県史』資料編 20 考古資料
相模原市 2010「勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書」『相模原市史調査報告書』6

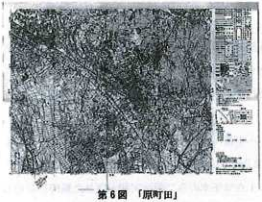
第2図　勝坂遺跡試掘調査概要図



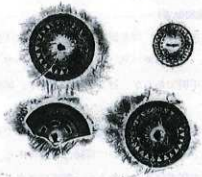
第3図　県史遺跡付近図

第４図　勝坂祭祀遺跡

第５図　試掘範囲図

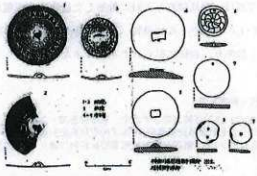


第６図　「原町田」



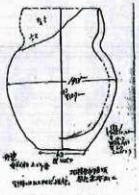
第７図　鏡拓本

第８図　鏡断面図

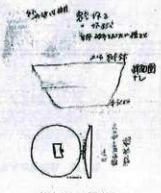


第９図　鏡及び石製模造品図版

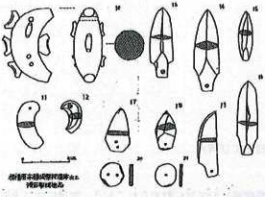
第10図　実測図１



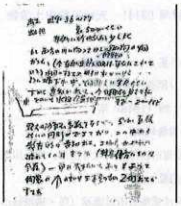
第11図　実測図２



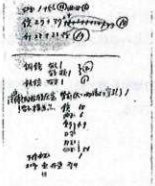
第12図　実測図３



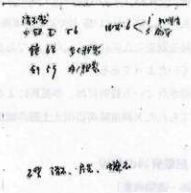
第13図　石製模造品図版



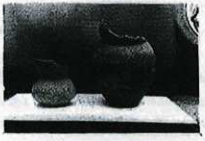
第14図　メモ書き①



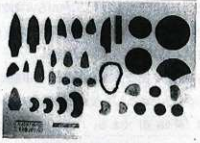
第15図　メモ書き②



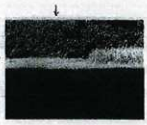
第16図　メモ書き③



第17図　土器集合写真



第18図　遺物集合写真



第19図　現場写真①

第20図　現場写真②

年報番号 03141　天神遺跡出土遺物

1．赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

昭和 23（1948）年

[資料保管場所]

横須賀市自然・人文博物館、神奈川県立歴史博物館および個人。

[資料概略]

資料は横須賀市博物館（現・横須賀市自然・人文博物館）の封筒に収められており、封筒には「横須賀市追浜天神遺跡　昭和二十三年　横高生（個人名）発見」と書かれている。

封筒の中には土器の実測図 13 枚が含まれている。これらは弥生時代末期～古墳時代中期に比定される土器と見られ、総点数は 25 点である。実測された遺物は個人所蔵のものと、赤星氏が昭和 23 年に横須賀市天神遺跡を調査した際に出土したものである。実測図には実測者２名の名前があり、うち１名はこの調査に同伴していたようである。

同封されている資料には、赤星氏による遺跡の調査所見や周辺地図を書き記したメモ書きのほか、赤星氏に宛てられた天神遺跡周辺出土土器の鑑定依頼の手紙も含まれている。

2．記載資料の整理

[遺跡・遺物概要]

実測図は 13 枚で、実測されている土器は 25 点である。これらのうち第 21～31 図の土器は、赤星氏が昭和 23 年１月４日に天神遺跡を調査した際に出土したものである。

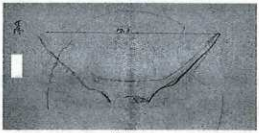
第 21～24 図は弥生時代末期から古墳時代初頭に比定される土器の実測図で、このうち第 21・22 図は土師器の高坏である。第 23・24 図は壺形土器１点の実測図と口縁部の拓本であり、実測図には「羽状縄文」、「内面丹塗」（赤彩）の記載がみられる。

第 25～31 図は古墳時代初頭から中期に比定される土器の実測図である。器種としては甕形土器が９点と最も多い。このうち５点が台付甕の脚部片（第 25・26 図）、３点が口縁部片（第 27 図）、１点が小型の甕形土器（第 28 図）である。口縁部片のうち２点はＳ字口縁だが、第 27 図中断の口縁部片と小型の甕形土器の口縁は「く」の字に屈曲するものであり、前者２点については古墳時代初頭に、後者２点については古墳時代中期に比定されるものである。

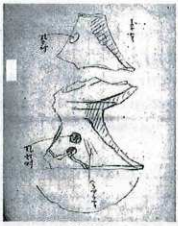
第 29 図は土師器の底部片 3 点の実測図であり、このうち２点は平底の甕の底部片である。同図中の一番下の１点は壺形土器もしくは坩の底部片と見られる。底部径は 2.6 ㎝を測り、外面には「丹塗」の記載が見られる。これらには「五領式」との記載があり、古墳時代前期に比定される。

第 30 図は高坏の坏部～脚部、脚部の破片の実測図であり、このうち脚部についてはその形状から古墳時代前期後半に比定される。第 31 図は口径７㎝、底径 3.5 ㎝、器高６㎝を測る小型の鉢で、古墳時代前期に比定されるものである。

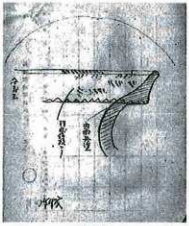
資料には天神遺跡周辺で個人が発見・所蔵していた土器３点と、個人蔵と思われる土器５点の実測図も含まれている（第 32～36 図）。いずれも塚田明治氏が実測したもので、このうち前者３点は昭和 31 年に記録されたものである。



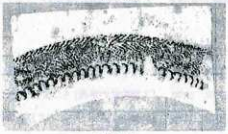
第 21 図



第 22 図



第 23 図



第 24 図

第 32 図は短頸の小型壺形土器 2 点で、弥生時代末期から古墳時代初頭に比定されるものである。第 33 図は小型の器台であり、こちらは古墳時代前期に比例されるものと思われる。これら 3 点の土器は所蔵者から赤星氏に鑑定依頼のあったもので、今回の資料に同封された依頼書には壺形土器 2 点の外面には赤彩が見られる、との記述がある。

第 34～36 図は短頸の小型壺形土器 3 点と鉢 1 点、高坏 1 点の実測図であるが、第 36 図は第 35 図の土器 3 点に高坏 1 点を加えて清書したものである。第 34 図の短頸小型壺は五領式のもので、古墳時代前期に比定されるものである。第 35・36 図の小型壺 2 点と鉢、高坏は弥生時代末期から古墳時代初頭に比定されるものである。

以上のことから、今回この資料に収められた実測図には主に弥生時代末期から古墳時代初頭に比定される土器と古墳時代前期に比定される土器が多くみられ、中には古墳時代中期にその特徴を求めることができる遺物も含まれていることが分かる。

本遺跡は横須賀市追浜本町 [redacted] 他に位置し、平潟湾を囲うようにして形成された砂丘状に立地している。戦時中に海軍が防空壕・交通壕を作るため、畑地を切り取った際にその断面中に遺物包含層が現れたことから、市内の高校生により発見された。本格的な調査が行われたことはなく、赤星氏らによって行われた調査によって少数の土器が採集されたのみであり、現在遺跡周辺は住宅密集地となっている。

上記のように、この時採集された土器や他の機会に発見された土器は、主に弥生時代末期から古墳時代中期に比定することが可能であることから、天神遺跡は当該期の遺跡であることが推測される。遺跡の南東約700mには同時期の遺跡としてなたぎり遺跡があり、天神遺跡も同様の性格を有していたと考えられている。

赤星氏らの調査によって採集された遺物は現在、横須賀市自然・人文博物館、神奈川県立歴史博物館に保管されている。

［掲載図書］

横須賀市　2010　『新横須賀市史 別編 考古』横須賀市

［掲載図書概要］

2010年刊行の横須賀市史である。本資料に含まれる実測図の遺物のうち、第⑦、⑧図の甕形土器、小型甕形土器が掲載されている。なお、第36図は報告等に掲載する目的で清書されたものと思われるが、管見の及ぶ限りこの図が掲載されたものは見られなかった。

〔小結〕

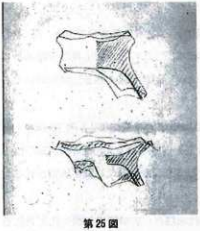
本資料には、天神遺跡ないし遺跡周辺出土の土器の実測図が多数含まれている。その大半は昭和23年に赤星氏が遺跡の一部を調査した際に出土したものである。現在遺跡は住宅密集地に位置しており、本格的調査は困難であるが、本資料の実測図に記録された遺物は天神遺跡が弥生時代末期から古墳時代中期に営まれた遺跡であったことを示す貴重な資料と言える。　（吉澤）

引用・参考文献

赤星直忠　1950　『先史時代の三浦半島』三浦半島研究会

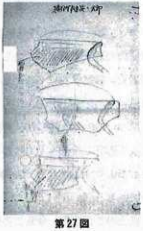
屋田明治　1969　「主要遺跡の解説」『三浦半島の古代文化－赤星直忠博士の業績を中心として』横須賀考古学会

横須賀市　2010　『新横須賀市史 別編 考古』横須賀市

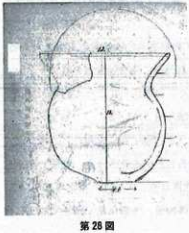


第25図

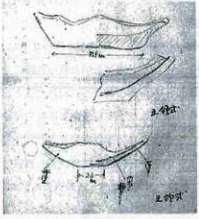
第26図



第27図

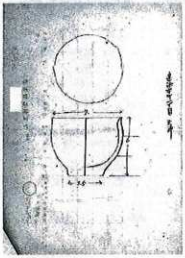


第28図

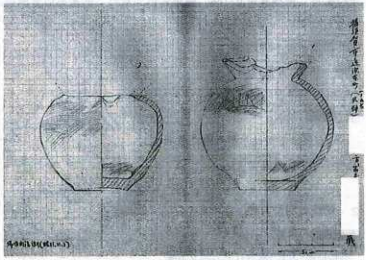


第29図

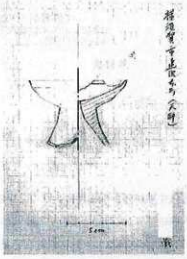
第30図



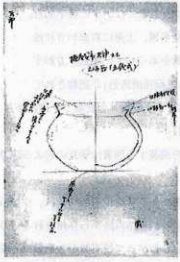
第 31 図



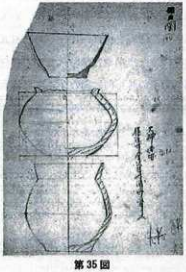
第 32 図



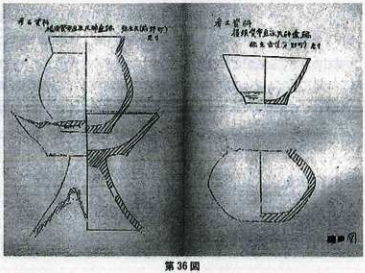
第 33 図



第 34 図



第 35 図



第 36 図

年報番号　横須賀市 03168　横須賀市公郷町　赤星直忠方西庭土中出土　滑石製紡錘車実測図

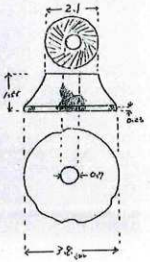
1．赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月日]

昭和 61 年 4 月 16 日

[資料概略]

Ａ４用紙に描かれた滑石製紡錘車(紡輪)の実測図（第 37 図）。



第 37 図

2．記載資料の整理

[記載内容の概要]

余白には「石質：滑石」「上辺径 2.1cm 底辺径 3.8cm 高さ 1.55cm 孔径 0.7cm」「側面上部にむかって若干回む。側面底辺共平滑、上面に右まわりに浅い平行沈線をめぐらす。側面下方わずかに欠く。色緑味淡灰色」と記載されており「戦前より土師器片包含地、土師は坏片、宗元寺跡出土のものと同型」とある。

[掲載図書]

本資料を掲載する図書は管見のおよぶ限り見当たらない。

[小結]

截頭円錐形を呈する滑石製紡輪は、中国・近畿地方では古墳時代中期初頭から後期にかけて、中部・関東地方では古墳時代後期以降から多用されるようになり、紡錘は畿内周辺で６・７世紀に出現する鉄製紡錘の段階的な普及にしたがって滑石製から鉄製へと転換する。関東地方では鉄製紡錘は８世紀に現れ９世紀以降に急増し、滑石製紡輪はそれに伴って減少する傾向が認められる(東村 2011)。本資料発見当時の詳細は実測図のみであるため不明だが、出土地の赤星邸庭が、近隣に位置する宗元寺跡と同型の土師器坏片包含地であると記されることから、本資料を寺域周辺に分布する当該期の遺物として注目していた状況が窺い知れる。宗元寺は７世紀末葉の創建と考えられる古代寺院であり、赤星氏が長年にわたって研究を続け、出土した布目瓦や礎石の分布、伽藍配置の推定などに関して数多くの赤星ノートを残している。当地の古墳時代後期の状況をみると、宗元寺跡近辺には有力墳墓の存在は認められないが北北西約 600m の谷戸内に所在する佐野横穴墓群には７世紀後半代の構築と考えられる横穴墓がみられ、赤星氏が「三浦記(一)」のなかで報告している。なかでも棺室の付く３号穴は横穴墓の終末段階であり、宗元寺の創設とほぼ一致する時期を示している。

（長澤）

引用・参考文献

赤星直忠 1927『三浦記（一）』『考古学雑誌』第 17 巻第 4 号　日本考古学会
川上久夫 2001『三浦半島の古代寺院 宗元寺・宗元寺から曹源寺』
東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡錘』
横須賀市 2010『新横須賀市史 別編 考古』

研究紀要 22

かながわの考古学

発 行 日　2017（平成 29）年 3 月 22 日
発　　行　公益財団法人かながわ考古学財団
〒232-0033　神奈川県横浜市南区中村町 3-191-1
TEL：045-252-8689　FAX：045-261-8162
http：//www.kaf.or.jp
印　　刷　アンクベル・ジャパン株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.22

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Stratigraphy of the Kanto loam in the area of Isehara and Hadano in Kanagawa 1

Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon culture in Kanagawa(Ⅷ): An example in the first part of late period. An aspect of the Horinouchi-type pottery Period,part7 13

Project Team for Yayoi Studies: Study of pit dwellings in the late of Yayoi period(1) 19

Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr.Naotada Akaboshi,A Pioneer of archaeological research in Kanagawa(14): A report of materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note" 29

Project Team for Nara and Heian Periods Studies:
Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa: The corpus of iron manufacturing artifacts(7) 39

Project Team for Medieval Age Studies:
Remains of the medieval period in central Kanagawa(2): 55

Project Team for Early Modern Age Studies:
The corpus of structural remains of the road in the Early Modern Age(2) 67

March, 2017

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan